

入会 60 周年を迎えて

今月 17 日に私は創価学会への入会 60 周年を迎えます。50 周年の時は信仰を軸とした長文のミニ自分史を書きました。あれから 10 年、幸いにも当時目標としていたものをほぼ達成できたような気がします。まず健康だったことに最大の感謝。今回はミニ自分史の続きとして「気まま随想」に綴ってきた記事を参考に年ごとの主な出来事をまとめてみました。

(現役時代には 40 年近く日記を付けていましたが、62 歳で鬱に陥ったとき、過去を振り返るのは望ましくないのをやめたのです。「気まま随想」でそのときに合わせて大事だと思って事を綴ってきたことがここで助けになりました)

2012 年 (71 歳)



長女一家がスイスのジュネーブ勤務となったのを機会に 8 月に妻と訪問。名峰の連なるグリンデルワルトまで足を伸ばし標高 2000 メートルを超える高台にあるお花畑までケーブルを使いながら登った。難



峰アイガー北壁を眺めアルプスを満喫。その足で文学紀行の取材へ列車でパリに。中学生のときに読んだ「三銃士」(主人公ダルタニアン活躍に惹かれ本を読むようになった)と不朽の名作「レ・ミゼラブル」の作品の舞台を訪ねた。

2013 年 (72 歳)

1 月の「気まま随想」に「夢こそ人生を拓く力」を載せている。その通り、ひょっとした縁から 11 月には有楽町の東京国際フォーラムで



ミュージカル「赤毛のアン」

に出演することになった。国連クラシックライブ協会の主催

によるものだが、5 年前の



プリンスエドワード島訪問がこんなところで一つの実を結んだのも人生の軌跡の面白さである。「アン」の心を世界に発信したいから」と監督から指示されて舞台の最後にスペイン

語で会場の観客に呼びかける (他にも 3 カ国語で)、という思いもかけなかった役割まで担うことになった。さらに 12 月には、昭島市民会館の改装を記念して NHK のど自慢コンクールが開催された。会場は家の斜め前。せっかくの機会なのでと申し込んだ私は 10 倍近い競争のなか選ばれ予選会に出場した。曲目は「ベサメ・ムーチョ」をスペイン語で。ポンチョとソンプレロを身にまとい華やかないでたちだったが不合格。妻は“出たがりやさん”と揶揄するが、なんでも挑戦こそ人生を拓く力なのだ。

2014年（73歳）

2月の「気まま随想」には「73歳、私の健康管理」と題して書いた。出身の長野県が日本一の長寿県である要因に触れ、1日1万歩、7階の自分の部屋まで階段で上ること、水泳、テニス、ゴルフにときどき参加していることを紹介している。もう一つ大事なことはやるべき仕事があること。シニア向けの英語教室の講師、市報の配布、地元中学校の学習支援員の活動等でそれなりに忙しい。奇しくも今年、NHK朝ドラでは「花子とアン」が始まった。

2015年（74歳）

ホームページの開設から10周年、10月には国勢調査の調査員として2回目の任務を務めた。

2016年（75歳）

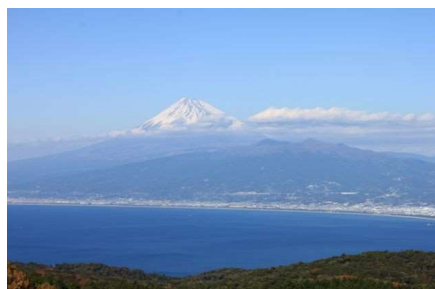


9月の「気まま随想」で「東京五輪でボランティア通訳」とその意気込みを綴っている。11月には聖教新聞で一緒だったI氏と二人でインドを訪問した。当初、二人の個人旅行として旅行社と企画を進めていたが、途中でJTBがずいぶん低価格でインド行きの団体旅行を募集しているのを知り、それに乗り換えた。とても経済的で日程的にも好都合の旅だった。もし、自分たちだけで行ったら不案内と治安事情で無事に帰国できたかどうかさえ分からない。ラッキーな巡り合わせだった。

2017年（76歳）

1月の「気まま随想」で「80歳までの夢とプラン」を取り上げ、70代後半の活動として、世界文学紀行は打ち止めにし、その代わりインドから始まった仏教伝来の旅で中国、韓国を訪問すること、金婚にあたる年にはパナマを再訪問しお世話になったメンバーに感謝を伝えること、また東京オリンピックに向けての準備状況と決意を綴っている。

11月には聖教新聞の仲間だったF氏とJTB企画の北京旅行に参加した。仏教伝来と言えば西域方面なのだが、結果的に無理なので陸続きの北京で意義をとどめ、万里の長城にも登った。出発日の前泊となるホテルでは、心配事が影響したのか脈が100を超え血圧も相当上がっているように思われた。心配性の自分は隣に寝ているF氏に「旅をキャンセルしたい」と弱音を吐いた。「大丈夫だよ」と説得され、機中の人となり、北京に着きバスで万里の長城まで着くと体調は自然に戻っていた。



同じ11月の下旬、高校同期のM君の企画による「富士山・伊豆半島バスの旅」に参加した。達磨山から撮ったカットは、富士山が横に長くたなびく雲を下に従えた最高の作品となった。

2018年（77歳）

1月「五輪ボランティアへ助走の年」、3月「喜寿

を迎える感慨」、5月「東京都観光ボランティア1年」、10月「定年後には人生の再充電を」12月「ソウルの地下鉄で受けた親切」などと「気まま随想」に綴っている。

韓国には昭島市内の同志でもある元聖教新聞のM氏とJTBの団体旅行で百済へ。日本への仏教伝来の地を訪ねる旅の意義をとどめた。フリーの日には二人で新羅の都のあった慶州、さらに南の港町・釜山を新幹線KTXで駆け巡った。

この年は五輪ボランティアと東京都観光ボランティアについての記述もあり、それぞれへの取り組みの姿勢が表れている。



2019年 (78歳)



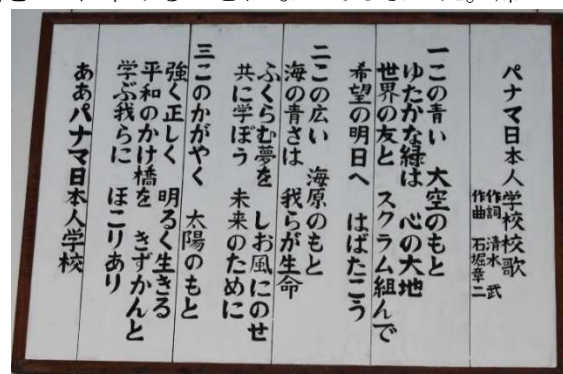
1月、2007年以来12年ぶり、妻はパナマから帰国後33年ぶりに現役時代に特派員として駐在していたパナマを訪問。目的は「お世話になったメンバーと国に感謝を伝える旅」で、現地では壮年部員の激励、病床にある人の家庭訪問、この間に亡くなったメンバーの追善勤行とSGIの活動一色だったが、現地ではパナマ文化会館でミニ文化祭を催し300人ほどが大歓迎してくれた。妻共々、大感動だった。30人ほどを招待したお礼の会食会も、病気のメンバーの家庭訪問も予定通りこなしたが、前立腺肥大からくる症状と時差によりほとんど眠られず、到着した翌日、帰国を1日早めることになってしまった。帰途、メキシコとハワイに寄るフライトもグリーンをキャンセルしエコノミーで切符を再購入という流れになってしまった。

そんななか、パナマ日本人学校の生徒たちが筆者の作詞による校歌を歌って歓迎してくれたこと、パナマのメンバーの心からの大歓迎が、Cさん夫妻との恩讐を乗り越えて「正義が最後に勝った」との思いが、全てを包んでくれたのだった。

2020年 (79歳)

1月、横浜港に停泊した大型クルーズ船の中で新型コロナウイルスの感染者が出たとテレビニュースで報道された。ウイルスはすぐに陸地にも飛び火、全国へ拡散していった。前年から始まったTOKYO 2020の研修会も感染防止のためオンラインに。小中学校も休校、シニア向け英会話教室も途中で終わり、全てがコロナ禍の影響を受けることになった。やがて世界的なパンデミックで医療も危機的状態になり、自分は一時「これで人類は消滅するかも」なんて思いまで抱くに至った。

こうした中でもペンは進み「サクラさん、遠慮なく咲いてね」(4月)と「気まま随想」(5月)にユーモアを含んだ記事を載せ、朝日新聞の「男のひといき」にもコロナ禍での生活についてのエッセイが掲載された。11月にはマスクをしながら3回目の国勢調査の仕事、12月の「気まま随想」には「2030年への夢・目標・ビジョン」が載っている。



2021年（80歳）

2月の「気まま随想」に「指針としてきた言葉の数々」を載せた。この機会に感謝の思いを込めて「池田先生と私」を書き上げた。そして先生ほかお世話になり信頼している方々にコピーを作り贈呈した（一部はメールで）。

3月には「80歳の上り坂に挑む気概」を載せたが、現実には記憶力、体力ともに急激な下降線にあることは日々実感している。いずれにしても、あと10年。最終目標は2030年の「創価学会創立100周年」まで世界平和への活動に最大限の貢献をしていくこと。それが入会60周年を機に改めて決意を新たにすることだと思っている。

※入会50周年の後の10年間に、ホームページ「気まま随想」に綴ってきた主な出来事を中心にまとめてみましたが、日常的には次のような生活を基軸に送ってきました。

- ◇ 毎日の朝晩の勤行で最低3000遍の題目を唱えること。創価学会創立100周年までに7000万遍が目標。
- ◇ 仕事としては、SGIで週2回の勤務（途中から1回になる）、シニア向け英会話の講師を週1回、広報配布を月に5～6回。地元の瑞雲中学校でステップアップ教室に学習支援員として週1～5回、また年に数回、各地でのセミナーや講演もしてきた。
- ◇ ボランティアとしては、5年前から東京都観光ボランティアとして新宿駅周辺と都庁の展望室で月に1回、またオリンピック大会ボランティアとして晴海の選手村で7月に5回参加した。
- ◇ 体力作りの運動として、毎日5000歩以上のウォーキング、月に数回のテニス（2020年夏からギックリ腰で走ると腰が痛く現在はしていない）、週に1回以上のスイミング、年に5～6回のゴルフコンペとそのための練習など。



晴海のオリンピック選手村で